

平城宮第126次現地説明会資料
～伝平城天皇揚梅陵北西地区の調査～

奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部
金子裕之

- 1 調査地 奈良市佐紀東町字塚本
- 2 事業主体 共栄建設株式会社
- 3 調査目的 分譲住宅建設に伴う事前調査
- 4 調査地の歴史的環境

平城宮の北側に平城天皇揚梅陵と治定される低平な円墳がある。この古墳は、1963・4年度の発掘調査により、平城宮の造営に伴って前方部を削平された全長260mにも及ぶ前方後円墳（市庭古墳）であったことが明らかとなっている。今回の調査地はこの古墳の後円部の西北で、濠と外堤の一部が含まれる。ところで、平城宮の北方には築地場区画された東西0.5km、南北1km以上に及ぶ広大な施設が最近発見され続日本紀にみる「松林宮」・「松林死」に比定されている。この推定松林苑南辺築地と平城宮の北辺大垣との間の距離は、約260mであるがこれは天平尺の900尺にあたる。平城京の条坊は天平尺の1800尺を1坊の単位として区画されており900尺はこの半坊分の距離に等しい。山城の平安宮は平安京大内裏図によると南北の距離が平城宮に比べて半坊分拡張され、この拡張部の中央の東西1坊分を大蔵省がしめている。こうしたことから平城宮においても平安宮同様に宮の北側に接して大蔵省が設けられていたとの説が唱えられている。調査地はこの大蔵省推定地の一面に含まれるためその関連施設の探究も調査の眼目の一つとなっている。

5 調査成果

市庭古墳は2重の周濠をもつ古墳であること、奈良時代には1重の濠は大規模に埋め立て2重目の濠は園池の一部に利用していることなどを明らかにした。

A) 古墳時代の遺構

今調査区における1重目の濠は、幅が上面で約42m、下底で約30m、深さは奈良時代の整地面から約4m、外堤の現存最高所から約5.5mを測る。濠の底

には約0.5m～0.6mの腐蝕土層があり自然木が出土した。葺石は墳丘斜面と外堤斜面に行われていたが、前者は遺存状況が良好なのに反し後者は悪くほとんど落下していた。

2重目の濠は幅約18m、深さは奈良時代に園池の一部に利用された際に掘り下げられ明確ではないが0.6～0.7m程度と考える。

外堤は幅約22m、表面は開田工事に際して削平を受けているが一部に埴輪列が残っている。埴輪列は5本分あり攪乱によってかなり失われているが約1.4m間隔でなることが明らかとなった。据えつけは円形掘形を掘って行っている。

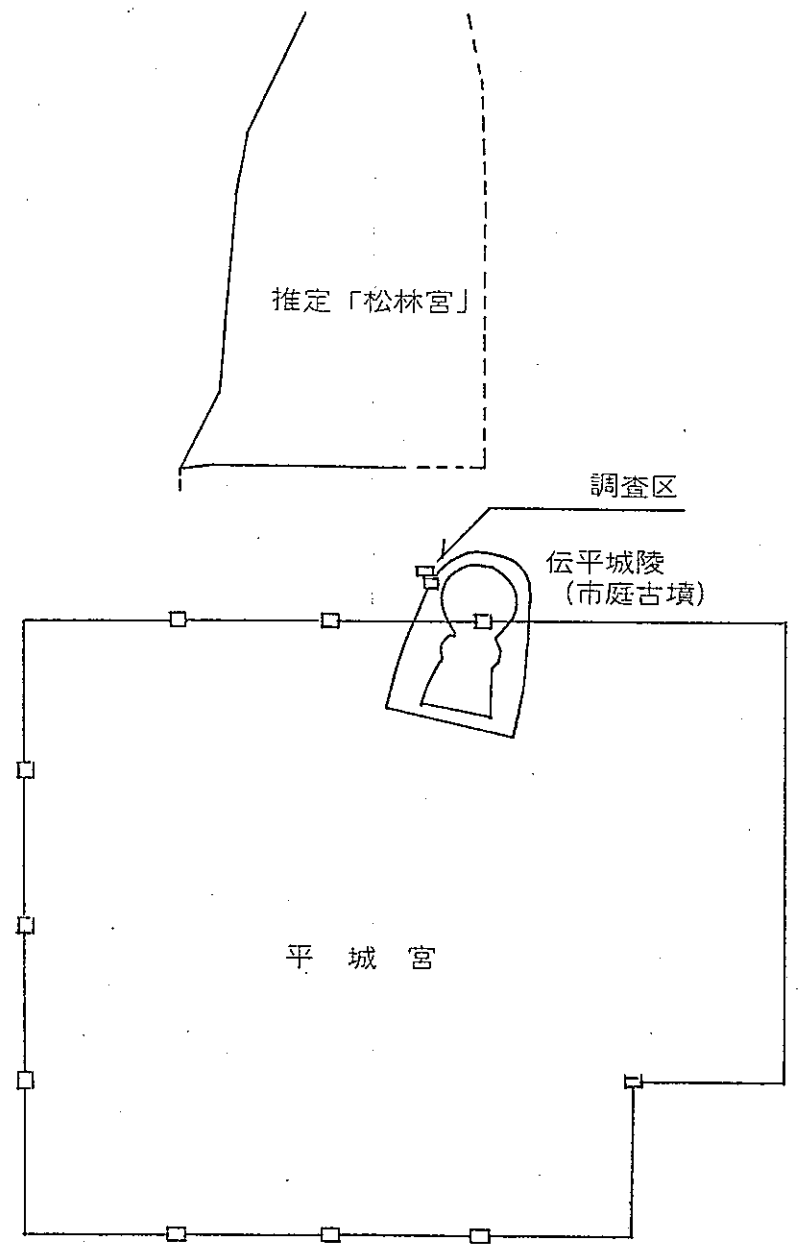
遺物は埴輪片で円筒埴輪、朝顔形円筒の他形象埴輪に楕形埴輪の破片などがある。

B) 奈良時代の遺構

2重の周濠を利用した園池と井戸、および礫を用いた盲暗渠がある。園池は2重の周濠の東岸を利用しここに小石を貼りつけ汀線を形成している。この汀線に接するように井戸が掘られている。井戸は直径1.3mの円形の掘形を掘り、一辺約0.5mの蒸籠組の井戸枠を据えたもので2段分が残っていた。掘立柱の南北間は2間分を検出、柱掘形は一辺0.7～0.8m、柱間は2.1m（7尺）等間である。盲暗渠は外堤上を東西に走り1重の濠に向ってのびる約24m分を検出、掘形は狭いところで0.5m次第に幅が広くなり最大で1.5m、この掘形のほぼ中央部に礫をおいている。

遺物は土器及び瓦塼類がある。土器は発掘区全域から出土したが井戸内の堆積土からややまとまって出土している。

瓦塼類は、池中の堆積中などから藤原宮式および平城宮式の軒瓦（6308-6663、6282-6721など）が多数出土した。



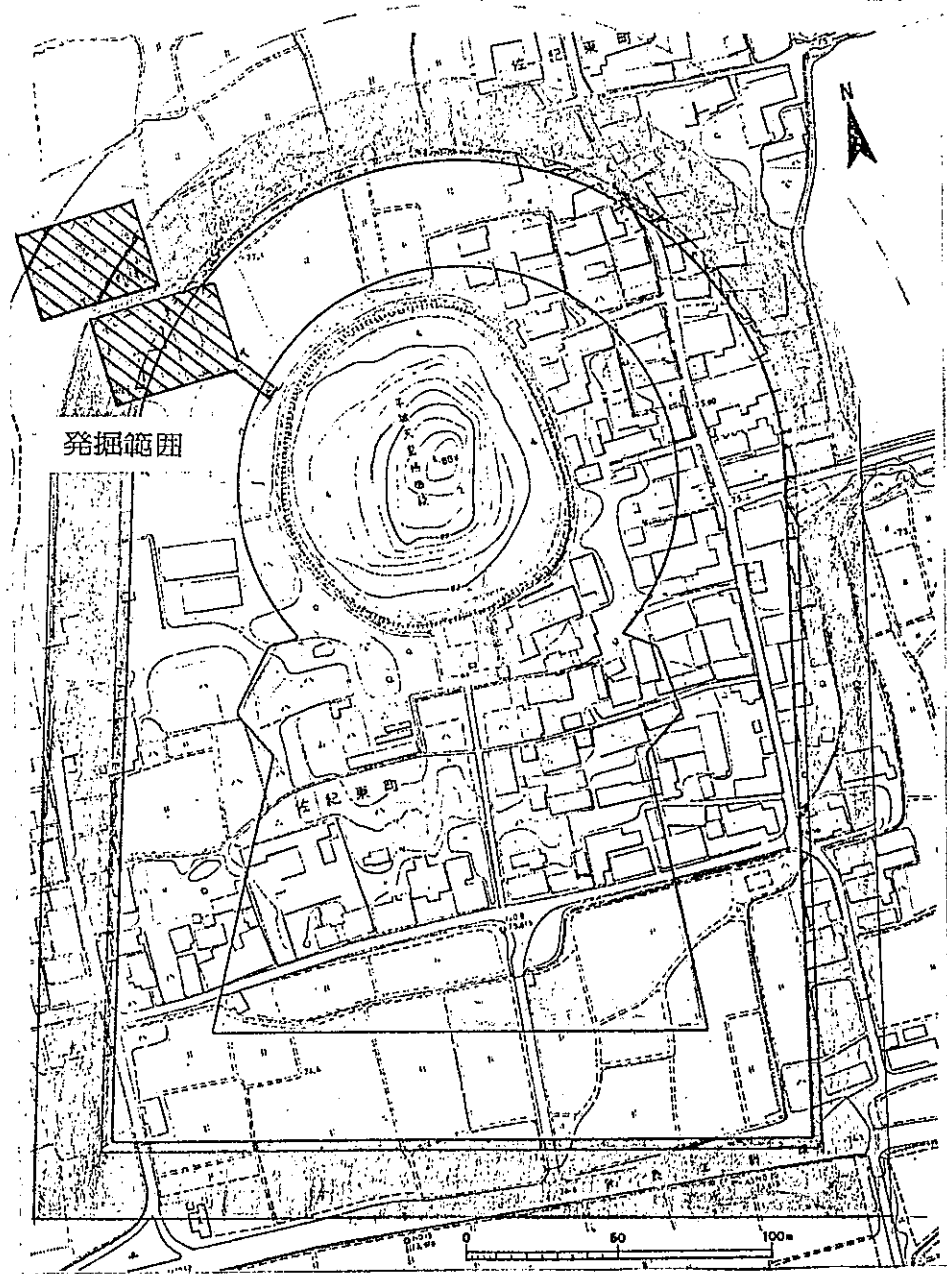
推定「松林宮」

調査区

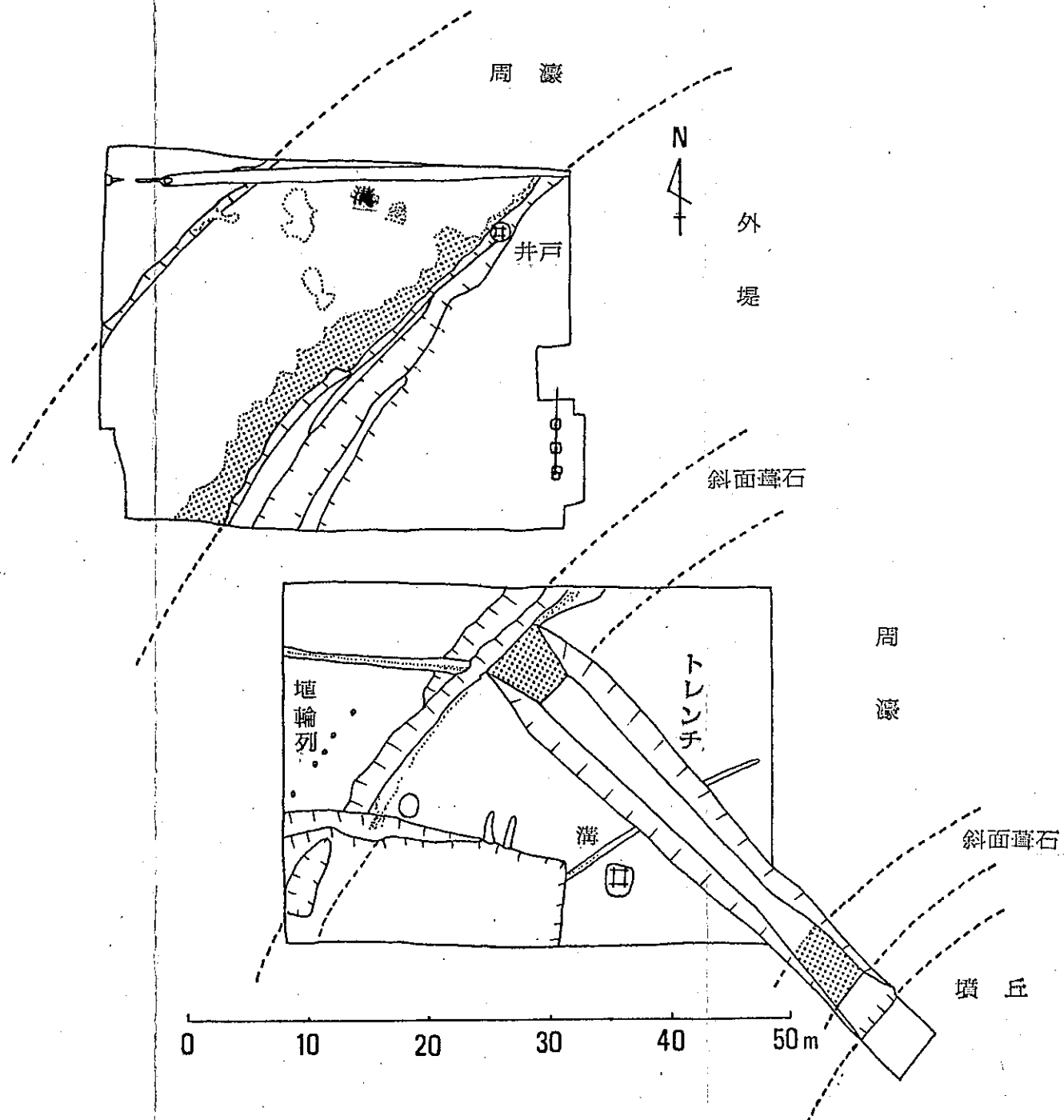
伝平城陵
(市庭古墳)

平城宮

調査地の歴史的環境



第2図 市庭古墳復原図



第3図 発掘遺構図